

人とトキが共生する豊かな地域環境をめざして

ひとつも トキも

vol.
6
Jun
2012

人とトキ

- 02 日中国交回復40周年記念行事
- 02 陝西省洋県小学生トキ保護始動式開催
- 03 董寨自然保護区トキ保護開始式
- 04 寧陝県 有機クリ・薬用菌栽培モデル事業
- 06 ドジョウの養殖試験事業
- 07 寧陝県用水路修復・水田回復/董寨順化ケージ着工
- 09 野生トキ ヒナのバンディング
- 日中国交回復40周年記念行事
- 10 董寨バードウォッチング・エコツアー検討会
- 11 「ODA視察ツアー」参加者募集中



人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト



白路完全小学校にて行われたトキ保護起動式で小池真実さんによる紙芝居の披露

トキの紙芝居に全校児童が大歓声

日中国交回復40周年記念行事の一環として、4月12日、洋県槐樹関鎮白路完全小学校で全校児童320人が参加し「陝西省洋県小学生トキ保護始動式」を開催しました。式典では村の幹部や教育局、校長先生、トキ自然保護区幹部よりトキ保護についての講演、平野専門家からは日中トキ交流の歴史の講義を行いました。プロジェクト作成の環境意識啓発グッズを贈呈したほか、当プロジェクトでアシスタント兼通訳として活躍している小池真実さんが、トキをテーマにストーリーや絵を手掛けたオリジナルの紙芝居を自ら披露。初めて見る紙芝居に興味津々の子ども達は、ページを一枚、また一枚とめくるたび一斉に「わぁ！」と歓声をあげ、その声は次第に大きくなり、最後には大きな拍手と子ども達によるスタンディングオベーションとなりました。元気いっ

陝西省洋県小学生トキ保護始動式開催

ぱいの子どもの歓声と共に会場は生き生きとした笑顔にあふれ、大人も子どもも一緒になってトキの美しさや大切さを再確認することができました。

5年生を対象とした「トキ絵画教室」では、最初に米田専門家よりトキの模型を使ってトキの生態についての授業、その後小池さんによるトキデッサンの指導を行いました。「こんな風になってるんだ！」と間近で見ると本物そっくりのトキの模型を前に目を輝かせる子ども達。米田専門家の講義にもうなずきながら熱心に聞いていました。最後には「ぜひまた来てください！」と授業で描いたトキの絵のプレゼント。どの作品もトキに対する愛情が感じられるすばらしいものばかりでした。

午後は洋県愛鳥協会の協力のもと、プロジェクト作成の環境教育用教材「董寨の鳥」を使用し、バードウォッチン

グを実施。参加者したのは、5年生で特に生物や野鳥に興味のある15名。米田専門家からバードウォッチングについての解説を受けたのち、子ども達と学校周辺を観察して回りました。双眼鏡を使った本格的なバードウォッチングに夢中で鳥を目で追う子ども達。晴天ということもあって学校周辺ではスズメやカササギを含む11種類の鳥を確認できたほか、抱卵中のトキも観察！こうしたバードウォッチングは、鳥や自然とふれあいながら楽しく環境保護の知識を身につけることができるため、子ども達はもちろん学校の先生方からも大変高い評価をいただきました。

トキが暮らす郷の豊かな自然をこれからも守っていくための基礎として、子ども達にとって意味のあるものになることを期待しています。



今年、2012年は日中国交回復40周年という記念すべき年です。当プロジェクトでは、トキ保護始動式を始めたとして40周年関連事業を実施しています。



2012
日中国交回復友好年
中日友好協会



絵本を披露する小池真実さんの話に聴き入る300人の児童

河南省董寨自然保護区トキ保護開始式

絵本やクイズでトキへの理解を深めた開始式

洋県に引き続き、河南省羅山県の董寨自然保護区でもトキ保護開始式を行いました。野生下でトキが息しない董寨保護区では、子どもを含め地域の住民はトキそのものを知りません。現在建設中の順化ケージが完成し、順化訓練が進めば来年にはトキが放鳥される見込みとなっており、トキに対する住民の認識を高めていく必要があります。

今回は、5月9日に董橋小学校、10日には高寨小学校でトキ保護開始式を実施しました。1年生から3年生までの全校児童40名という小規模な董橋小学校、1年生から6年生までの児童300名が在籍する高寨小学校、それぞれの全校児童を対象としました。

開始式では村の幹部、校長先生、および自然保護区の局長からトキ保護の重要性についての講義があり、児童代表によるトキの保護に関する決意の表明がありました。平野専門家からはトキを含めた日中交流の歴史やトキに関連するクイズ、米田専門家からはプロジェクト作成の環境教育用教材「董寨の鳥」の紹介、アシスタントの小池さんは絵本を用いた意識啓発などを行いました。

董寨自然保護区内の小学校や放鳥後にトキが飛んでいく可能性の高い地域を重点的に、今後も引き続き同様の活動を実施する予定です。



董寨自然保護区朱家貴副局長による講話



トキ保護の決意表明をする児童代表



寧陝県寨溝村における有機クリ・薬用菌栽培モデル事業

トキ生息地での住民生活向上に向けた有機栽培モデル事業

放鳥後のトキが定着している寧陝県寨溝村

寨溝村の概況

寨溝村は、寧陝市街地の北約9kmに位置し、戸数は324戸、人口は1100人余り(2010年)です。村域は長安河に沿って南北に長く伸び、4つの村民小組(日本の字に相当)に分かれています。そのうちの一番大きい谷が一組で、ここにトキ野生復帰基地が置かれており、放鳥されたトキが定着し、ねぐらや営巣地もあります。

寨溝村における農業の現状

寨溝村の耕地等は、水田701ムー(約46.7ha)、畑380ムー(約25.3ha)、板栗2700ムー(180ha)、クルミ400ムー(約26.7ha)等となっており、外地への出稼ぎを除くと、主な現金収入源は、シタケ・漢方薬原料、家畜・家禽等です(米は主に自家消費)。20～40代の男性はほとんど出稼ぎに出ており、中高年や主婦が農業の主要な担い手になっています。

板栗栽培の現状と課題

板栗は日本では天津甘栗として知られている小粒のクリで、陝西省では秦嶺山脈南部一帯で広く栽培されています。中でも寧陝県は代表的な産地で、寨溝村でも山の斜面等各所に板栗の木が見られ、農家の重要な収入源となっています。しかし、もともと自生の栗が多く、品種改良(接ぎ木)率は約5割、

また剪定・施肥をほとんど行わない半野生状態で、天候不順による収量減や低価格のため、収益は安定していません。

漢方薬原料の菌類栽培

秦嶺山脈には漢方薬の原料となる様々な植物が自生していますが、菌類の一種の「猪苓」やラン科の「天麻」は、1000m以上の山地の環境に適し、栽培はあまり手間がかからず、高値で売れることなどから、山村の副業として注目されています。寧陝県内でも取り組んでいる例がありますが、種菌が高価で、また栽培知識がないことなどから、寨溝村では手掛けている農家はこれまでほとんどありませんでした。

モデル事業の形成経緯と基本的な枠組み

プロジェクト開始後、住民生活向上モデル事業について、県林業局、寨溝村等の関係者と検討を重ねました。

板栗栽培は地元のほとんどの農家が手掛けているため、波及効果は大きいのですが、近年天候不順で収量が低下し、収益がほとんどない状態が続いたことから、農民はあまり熱心ではありません。一方漢方薬材の栽培は高値での販売が期待され、取り組んでみたいという農家が沢山います。

落ち葉がふんだんに供給されるクリ園の林床は猪苓や天麻の栽培に適しており、土地の立体利用が可能です。こ

れらの菌類や植物には農薬や化学肥料は有害であるため、必然的に無農薬のクリ栽培となり、トキの生息環境も守ることができます。さらに、天麻は最短2年で収穫が可能のため、短いサイクルでモデル事業の成果を実証し、成果を拡大することができます。

こうしたことから、寨溝村では、板栗と猪苓、天麻の栽培を結合させた立体式栽培に取り組みすることとし、以下のような枠組みで事業を進めることにしました。

(1) モデルクリ園の設定

寨溝村一組の谷の上部にある既存のクリ園をモデル園に設定し、接木、剪定等の樹園改良・管理を重点的に実施するとともに、林床には猪苓や天麻を植え込み、一体的に栽培管理を行います。モデルクリ園は約50ムー(約3.3ha)の面積を対象としています。

(2) クリの接ぎ木の推進

全村のクリ園のうちプロジェクト開始時点ですでに約5割が接ぎ木を終了していたので、残る5割の全部の接ぎ木を完了させ、全村のクリの品種改良を完成させます。このため、プロジェクトから合わせて2万本の接ぎ穂を村民に提供します。

(3) 猪苓栽培モデル事業

農家に種菌を提供し、農家が栽培管理を行い、3年後の収穫を目指します。



村会議室で行われた有機クリ栽培管理研修



猪苓の植付実技指導 (2011年12月)



プロジェクトで作成した栽培ハンドブックを手にする農家の人々

種菌は1戸当たり2400元(約3万円)と高価なため、栽培農家は10戸に限定しましたが、収穫した猪苓の一部を他の農家に無償で提供することを条件づけ、他の農家への波及を図ることにしています。

(4) 天麻栽培モデル事業

天麻は最短1年で収穫できるため、猪苓に加えて漢方薬材栽培の対象としました。農家に種イモ(根茎)を配布し、農家が栽培管理します。対象農家は合せて65戸です。

(5) 技術研修の実施

上記の事業に参加する農家を対象に技術研修を実施します。クリは接ぎ木、剪定、病害虫防除、土づくりなど、漢方薬材については種菌の植付、管理、収穫法などを研修します。毎年春と秋の2回の開催を目的とし、地元専門家に指導を依頼します。

これまでの取組み状況

第1回 春季有機クリ栽培管理研修

2011年3月9・10日の2日間で、講義と現場実習を組み合わせる形で実施しました。県林業局の徐永慧副局長がクリ園の科学的管理に関する講義を、安康市陳育朝站长寨溝村のクリ園では接木技法や春季剪定の現場指導を行い、約60名が参加しました。この研修に合わせ、クリ接ぎ穂1万本を農家に配布しました。

第2回 秋季有機クリ・猪苓栽培管理研修

2011年12月9日に寨溝村委員会の会議室で開催し、約60名が参加しました。クリの管理は、林地の鋤起こし、冬季保護、施肥、病害虫防除など、猪苓は、苗菌の植付および後期管理などで、講師は寧陝県科学技術協会の専門家胡茂毅氏と県食用菌弁公室の馬玉平准教授です。講義後に圃場で猪苓の植え付け方を指導し、参加者は講師を取り囲み熱心に学んでいました。並行して、村委員会が選定した10戸のモデル農家にそれぞれ20kgの猪苓の種菌を提供しました。

第3回 春季有機クリ・天麻栽培管理研修

2012年3月6日に寨溝村委員会の会議室で開催し、約80名が参加しました。春季のクリの接ぎ木方法とともに、今回は天麻栽培について植え付けや株分け方法等を研修しました。講師は前回の胡茂毅氏に加え、天麻については農民出身の栽培家である周茂議氏が担当しました。研修と合わせて、クリの接ぎ穂約1万本および天麻(白麻)の苗1950瓶を村委員会に提供し、天麻の苗は1戸当たり20瓶~400瓶が計65戸の農家に配布されました。

なお、会場にてプロジェクトの蘇専門家が編集した板栗(胡茂毅著)および猪苓(馬玉平著)の栽培ハンドブックを配布しましたが、大変好評でした。

このハンドブックは、要望を受け県林業局および食用菌弁公室にもそれぞれ2000部を提供しました。

事業のモニタリング

今後、クリについては2014年~2015年には、接木した品種からの収穫が見込まれます。接木による改良効果が十分発揮できるよう、クリ園の剪定整枝や施肥、害虫防除等の管理を適切に行っていく必要があります。もともと半野生栽培になじんできた農家に積極的に取り組んでもらうため、定期的に栽培状況をチェックし、研修会やアドバイスの提供などのフォローを続けることとしています。

漢方薬材の栽培では、猪苓については、早ければ植付から3年目の2014年には収穫が可能です。地中で成長するものであり、あまり手をかける必要はありませんが、腐葉土の供給、適度な土壌水分の維持等に留意が必要です。また、天麻は2012年秋から2013年春にかけて株分けの時期に当たっており、栽培状況をチェックしながら、時期を失しないよう種苗の採取と植付を行う必要があります。このため、これらの漢方薬材についても引き続き研修会等でフォローして行くことにしています。

背景

洋県の市街地近くにあるトキ飼育場（トキ生態園）は1993年に設置されたもので、以来20年にわたり、傷病トキの救護、飼育下での個体群の増殖、日本を含む国内外へのトキ分散基地といった役割を担ってきました。施設は一般公開され、年間20万人が訪れる重要な観光資源になっています。

飼育下のトキのエサ問題

現在、トキ生態園には約150羽のトキが飼育されていますが、ドジョウを主なエサとしています。飼育下のトキ1羽は毎日500gのドジョウを食べるため、毎週500kg、年間では約2.4tのドジョウが必要です。保護区管理局は現在、地元洋県や四川省の専門業者から購入していますが、価格の値上がりや冬季の供給不足で安定確保に苦労しています。外部業者からの購入は、農薬の混入等の不安もあります。

事前検討

保護区管理局は、過去にもドジョウの養殖を試みたことがありますが、不十分な飼育体制やサギによる食害のため不成功に終わっています。今回改めて事業実施が要望されたのですが、これまでの経緯を踏まえ、事業の実現可

能性について慎重に検討を行いました。

中国のドジョウ主産地は湖北省、浙江省等で、洋県はより北方に位置し、周辺地域で養殖が実施された例もありません。このため、プロジェクトの専門家、保護区職員、および地元農家が合同で湖北省の先進地視察を行い、養殖専門家の意見を聞き、最終的に技術的には実施可能という判断を得ました。また、経営面など取組み体制についても議論を重ねた結果、地元の農民が事業主体、保護区が購入者、プロジェクトが建築材料や技術指導の提供という枠組みで、試行事業を実施することとなりました。

事業内容

試行事業は4月に開始されました。事業主は地元農家グループで、トキ生態園に近い草バ村の水田に、二つの養殖池（露天池3700m²、温室式の池530m²）を造成し、5～6月にかけて合計860kg（74万5千尾）の稚魚を投入しました。プロジェクトはセメント、レンガ、防鳥ネット等の資材や工賃の一部を、また、保護区管理局は稚魚代等を負担しました。

エサ代や飼育管理は事業主の農家が責任を持ち、夏・秋にかけて育ったドジョウは保護区管理局が全量を買収

り、10～12月の間、トキのエサとして利用することになっています。現在のところ、生育状況は順調で、事業主の農家も大変意欲的に取り組んでいます。

期待される効果

この事業に期待される効果としては、次のような点を挙げるができます。

まず、保護区管理局ですが、農家からのドジョウ買取り価格は業者と同じで、コスト的には従前と変わりませんが、安全なドジョウが確保でき、また冬場のドジョウ不足を緩和できます。さらに、地元農民に副収入の機会を提供することで、トキ保護への積極的な協力を引き出すことができます。

農家にとっては、プロジェクトや保護区管理局による資材や種苗代等の初期コストの負担、また全量買取り保証によって、低リスクで事業に取り組むことができ、新たな現金収入の道が開けます。今回の事業は村内でも注目されており、成果が上がれば、新たな農家の参入も予想されます。

ドジョウの確保は他のプロジェクトサイトでも共通の課題となっており、本事業の経験や成果は、他の地区にも紹介していくことにしています。



a. 養殖されているドジョウ / b. 田んぼを掘削して養殖池 / c. 完成した養殖池; 手前が温室式、後方は露天池 / d. ドジョウ稚魚の放流 / e. 生育状況のチェック





寧陝寨溝村の用水路修復と水田回復

トキの餌場となる水田の復活へ

寧陝県寨溝村にはトキ野生復帰基地が設置され、2007年以来合わせて5回にわたり放鳥が実施されています。2012年春現在、寧陝県には、合わせて2群50羽余りの野生トキが生息していますが、寨溝村はそのうち主要な一群の生息地で、水田でエサを採るトキの姿を普通に見ることができます。

寨溝村は標高1100m前後の比較的開けた谷で、斜面に棚田が連なる美しい景観が見られます。しかし近年、都市部への出稼ぎで労働力が減少し、さらに水害による用水路の破損で農業用水が足りなくなり、トウモロコシ畑に変わったり、荒れたまま放置される棚田が目立っています。山がちな寧陝県の中で寨溝村は数少ない水田地帯の一つであり、野生トキのエサ場を確保するためにも、水田の復活は重要な課題になっています。

村民からも、水田復活のためにまず水問題を解決してほしい、と強い要望があったことから、プロジェクトとして

水路復旧に取り組むこととしました。事業は第一期および第二期の二つに分け、まず、昨年5月～6月に第一期工事として約460mの水路を修復(四季報第3号で既報)、第二期工事は今年の3月に着手し、頭首工(取水堰)と820mの水路の修復を4月初めに完了しました。

工事は、プロジェクトが石材や砂利、セメント等の資材を現物で提供、県水利局の指導の下、労務は村人が提供するという合作方式で進めました。自分たちの使う水路であるため、村民の積極性は非常に高く、石造りのしっかりした水路を田植え前に完成させることができました。完成した水路からの用水によって、今年の春は合わせて35ムー(約2.3ha)の水田が復活し、トキの採餌環境も改善しました。しかしなお、放棄されたままの水田も残されています。今後、労働力不足への対処も含めて、水田復活への新たな対策が求められています。



水不足で放棄された水田(2011年12月)



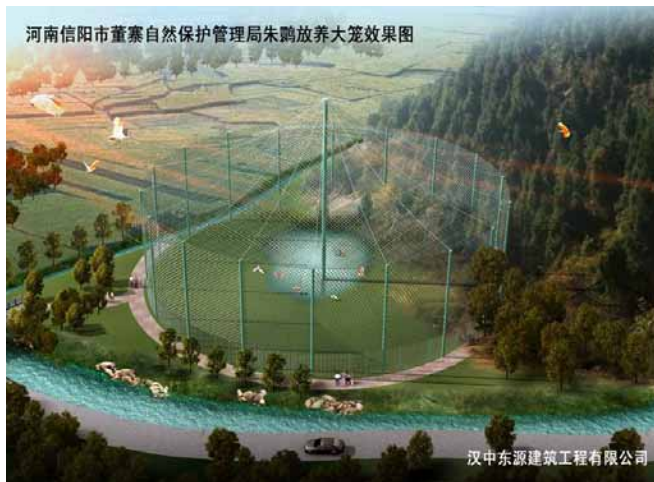
村民の手による用水路の工事



完成した取水堰(2012年3月)

董寨自然保護区トキ順化ケージ着工

董寨での来年の放鳥に向けて



順化ケージの完成予想図

董寨自然保護区は、国家林業局によって陝西省外で初めてのトキの分散基地に認定され、2007年に佐渡から返還された13羽を含む17羽のトキを導入、人工飼育繁殖に取り組んできました。2012年春現在、すでに飼育数は100羽を超え、次のステップとして来春にも野生復帰放鳥を予定しています。

放鳥前には、飛翔能力、採餌能力などを高める順化訓練を行う必要がありますが、そのためには十分な広さ、高さを有するケージが必要です。プロジェクトでは日本大使館による草の根無償資金協力と連携してケージ整備を支援することとし、今年の4月上旬に工事が開始されました。総事業費は約290万円(うち日本側資金約150万円)で、プロジェクトからは工事に必要な鋼材やワイヤー等の資材を提供しました。

建設場所は既設のトキ飼育場に隣接し、ケージは面積2,860m²、直径30m、高さ36m、ケージ内には湿地や水路も整備される予定です。計画では10月末に完成、飼育中のトキを新ケージに移し、順化訓練を開始することになっています。

トキの繁殖期である春、洋島では野生トキの営巣を確認する繁殖状況調査が毎年行われています。今年の調査は4月16日から27日までの2週間でわれ、前半の1週間は、ねぐらや採食地でトキの状況を観察したり、地域の農民から営巣状況に聞き取るなどして情報を収集します。後半は、それらの情報を元に営巣地の直接観察、以前から

使用されている巣の使用状況の確認を行います。このうち、後半の1週間をプロジェクトの活動として、米田専門家および寧陝、河南省董寨の各サイトから2名ずつが参加しました。

繁殖期はトキが敏感な時期であるため、巣には近づかず見える所から観察を行います。今回は事前に調査票を作

成し、このフォーマットに従って記録することを試みました。寧陝や董寨の職員も、調査手法を学ぼうと熱心に取り組んでいました。

保護区の中だけでなく、周辺の生息地まで広がって行われた今回の調査から、確認された巣は全体で150を超える見込みとのこと。

調査に不可欠な地域の農民とともに営巣中のトキの様子を観察

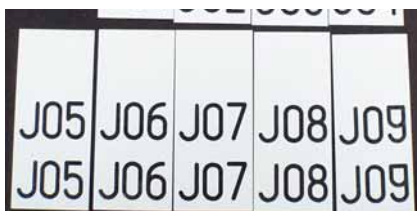


番号入りカラーリング作成実習

洋島での野生トキの繁殖状況調査に合わせ、ヒナに装着する個体識別用の番号入りカラーリングを作成する研修会を行いました。昨年は洋島の職員を対象にしましたが、今回は寧陝および河南省董寨の各サイトの職員を対象に実施しました。カラーリングの作成実習では、番号入りのプラスチック板を沸騰した湯の中で軟化させてから、アルミパイプの型に合わせて成型する工

程を米田専門家が指導しました。

今後は、バンディングセンターでプラスチック板に番号を刻印し、各サイトで成型して作製したリングをトキに装着していく計画です。野生トキに番号入りのリングを装着することは、個体識別には不可欠であるだけでなく、統一したルールのもとで作成されたリングを使用することにより、個体情報の管理にも有益となることが期待されます。



番号が刻印されたプラスチック板



完成した番号入りプラスチックカラーリング



職員が木に登りトキのヒナが入った袋を地上まで降ろす(寧陝県)

野生下のトキでは、巣立ち前のヒナに足環を装着するバンディングが行われています。5月14日に寧陝県、15-16日に洋県でそれぞれバンディングに米田専門家が同行し、指導を行いました。

寧陝県では林業庁の職員が直接木に登り、捕獲したヒナをメッシュの袋に入れて地上に降ろし、巣の状況を確認したり測定を行います。巣の下で待機している職員は、降ろしたヒナに番号入

りカラーリングと金属リングを装着し、測定を行います。今年は昨年と同じ6巣で営巣しており、この日は1巣2羽のヒナにバンディングを行いました。

洋県では、巣のある地域で電柱工事などの作業員など木登りのうまい人を雇って木に登ってもらい、ヒナをカゴに入れ地上に降ろします。巣の下で待機している保護区の職員がバンディングや計測を行い、再びカゴを引き上げて

巣に戻します。バンディングは地域全体を5組程度のグループで担当し、孵化後25～30日に達した巣のヒナを順番に捕獲しています。洋県では、新しく見つかった約50巣を含め170～180巣と非常に多い一方で、ヒナの成長が早く、悪天候などにより作業ができない日が続くとヒナが大きくなりすぎ、バンディングの適期を逃がしてしまうこともあるとのこと。

野生トキ ヒナのバンディング

樹上と地上で連携しながらヒナへリングを装着



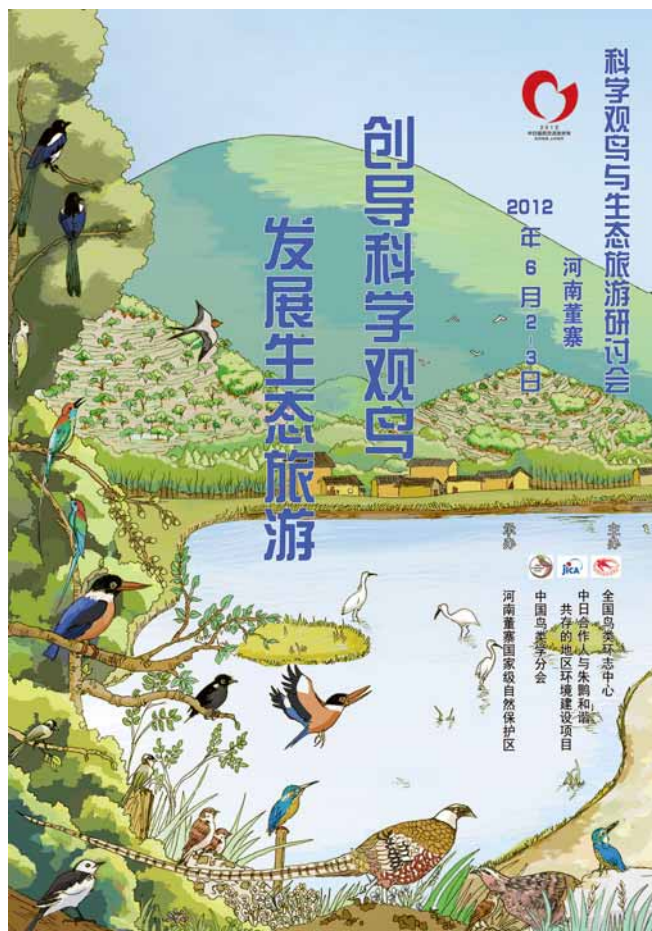
地上でヒナの計測やリングの装着を行う作業

董寨バードウォッチング・エコツアー研討会

バードウォッチングのマナー向上を目指して関係者が議論



ルリノドハチクイ



多くの鳥が描かれたプロジェクト作成による検討会のポスター

6月2-3日、JICAトキプロジェクトおよび中国鳥類学会の共催で、日中国交回復40周年記念行事の一環として中国全土の野鳥関係者を対象とした「バードウォッチングとエコツアー研討会」を董寨自然保護区内の靈秀山ホテルで開催しました。検討会には中国各地の鳥類研究者、自然保護区、民間野鳥愛好団体、報道関係者、国内支援委員の上田恵介教授やプロジェクト関係者を含む30名あまりが参加しました。

初日は早朝5時からのバードウォッチングを楽しんだ後、夕方6時まで講演が行われました。上田恵介教授をはじめ、張正旺中国鳥類学会会長、趙欣如北京師範大学教授、黄秦浙江野鳥会理事など全国の野鳥研究および野鳥観察の専門家が各地のバードウォッチングの現状を報告しました。

翌日もスタートは早朝のバードウォッチングから。保護区職員のご案内によるバードウォッチングでは、オナガギジ、ヤイロ

チョウ、ルリノドハチクイなど董寨を代表する、珍しくきれいな鳥を数多く観察することができました。午前中は董寨保護区のトキ飼養センターを見学、午後には全国鳥類バンディングセンターの陸軍主任が提示した「バードウォッチングマナー」について活発な討議を重ね、中国では初となる「バードウォッチングのマナーの提唱書」の草案を作成しました。このルールは今後、関係者がさらに検討を重ね、成文後は中国全土への普及を図る計画です。

現在、中国では経済成長に伴い、バードウォッチングの参加人口は急速に増加しています。一方でマナーの問題も顕在化しつつあり、今回日中合同で作成したルールが広く普及することにより、バードウォッチングのマナーが向上することを目指しています。



専門家による発表が行われた検討会



朝霧のなか、早朝から行われたバードウォッチング



検討会の参加者全員での記念撮影

第2回プロジェクト合同調整委員会開催

6月8日、秦嶺山脈の南麓、柞水県にて、プロジェクトの第2回合同調整委員会（JCC）が開催され、中国側は国家林業局保護司の嚴句副司長、対外合作中心の劉立軍副主任、全国鳥類バンディングセンター（プロジェクト事務局）の陸軍主任、陝西省林業庁白永慶副庁長、河南省林業庁王徳啓副庁長、漢中朱鷺自然保護区管理局丁海華局長、寧陝県林業局柯曉偉局長、董寨自然保護区管理局阮祥鋒局長、洋県政府蒙燕鈺副局長など、日本側は日本大使館岡崎一等書記官、JICA北京事務所広沢次長、足立主任など合わせて37名が参加しました。

議題は、2011年度の活動状況の報告、2012年度の活動計画の提案及び5年間の活動スケジュール（PO）の修正で、いずれも原案どおり承認されました。交換では、調査活動や広報強化に関する指摘や要望を頂きました。



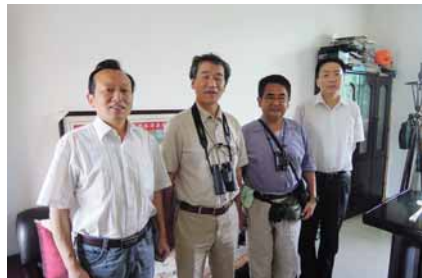
運営指導調査が行われました

5月28日から6月4日にかけて、当プロジェクト国内支援委員会の上田恵介委員による運営指導調査が実施されました。まず、洋県や寧陝県でトキの生息状況や飼育状況を視察し、生息地の抱える問題などについて意見交換を行いました。董寨保護区ではバードウォッチング検討会に参加し、講演をしていただきました。



上田 恵介 委員

鳥の行動生態学、鳥と植物との関わりなどを専門とする研究者。日本鳥学会や日本動物行動学会の役員、日本野鳥の会評議員、WWF（世界自然保護基金ジャパン）の自然保護委員会委員などを務める。現在、立教大学教授。



洋県にて丁局長、路副局長と意見交換

「ODA 視察ツアー」参加者募集中

JICAではH.I.S.との共同企画として、「JICA活動最前線 中国を知る7日間」ツアーの参加者を募集しています。10月16日出発～22日到着のツアースケジュールには、トキの観察が予定されているほか、JICA 専門家を交えた食事会も予定されています！

ご関心、興味のある方はお早めにお問い合わせください。詳細はH.I.S.ホームページよりご覧ください。

JICA 活動最前線 中国を知る7日間

www.his-j.com/kanto/corp/group/inspection/jica_china/

H.I.S. 団体旅行 | JICA活動最前線 中国を知る7日間

JICA 活動最前線 中国を知る7日間
10/16(火) 東京/大規模

【旅行申し込み方法】
旅行申込みは「ツアー」をお早めにお申し込みください。お早めにお申し込みください。お早めにお申し込みください。

申込フォーム

目的地	ツアーコース	料金
北京	北京1泊2日 (2泊3食)	178,800円 / 大規模 196,800円
北京	北京1泊2日 (2泊3食) / 大規模 196,800円	178,800円 / 大規模 196,800円
北京	北京1泊2日 (2泊3食) / 大規模 196,800円	178,800円 / 大規模 196,800円

※このツアーは「ODAスタディツアー」の受付となります。他のツアーとの組み合わせはできません。予めご了承ください。

お申し込みはこちら

遼寧省双台子河口保護区の
ズグロカモメ調査

ズグロカモメは世界でも極東アジアだけに生息し、個体数は10,000羽余りといわれています。主に黄海沿岸の塩性湿地で繁殖し、山東省以南の沿岸地域、ベトナム、台湾、南日本などで越冬地しています。1996年以来、日本の環境省、北九州市、山階鳥類研究所と中国の全国鳥類環志中心(バンディングセンター)は中国にあるズグロカモメの繁殖地と、中国と日本の越冬地の保護に取り組んでいます。

当プロジェクトカウンターパートの全国鳥類環志中心および本邦所属先の山階鳥類研究所からの依頼により、米田専門家が世界最大のズグロカモメの繁殖地である遼寧省盤錦市の双台子河口での調査に参加しました。この調査は、繁殖地の生息状況調査とともに、人工衛星追跡型の電波送信機を装着、また、主に雛に番号入りのカラーフラッグを装

着し、ズグロカモメの渡りルートを解明することが目的です。

調査の結果、ズグロカモメの繁殖地は10年前から約20km西に移動していました。そこでは約3,000巣が確認され、他の所ではほとんど確認されませんでした。世界のズグロカモメの8～9割が繁殖している双台子河口保護区の中での繁殖コロニーが1か所に集中していることは、この重要性和、集中によるリスクを十分に認識した保護対策を講じていく必要があります。

今回の調査では200羽のズグロカモメに番号入りのカラーフラッグと金属リングを装着し、このうちの成鳥4羽に装着した電波送信機による追跡を開始しました。今後、日本または中国南部に渡っていく時のルートが解明されることを期待しています。



人工衛星追跡型の送信機を装着したズグロカモメの成鳥



ズグロカモメのヒナのバンディング



調査参加メンバーの記念写真

日本の小学生がトキ情報コーナーを訪問!

春休みを利用した旅行で西安を訪れた、勝濱直椰(かつはまなおや)さん6年生(訪問時)と賢介(けんすけ)さん4年生の兄弟。「地球の歩き方」西安編にてトキ情報コーナーがあることを知り、3月27日にプロジェクト事務所を家族で訪問。プロジェクトの活動やトキの生態についてJICA専門家から講義を受け、「なぜくちばしの先は赤いのですか?」「水田の泥の中で、餌と石を見分けられるのですか?」などトキについて鋭い質問をしていました。



トキ情報コーナーのご案内

西安事務室にはトキに関する情報を提供する「トキ情報コーナー」を設置しています。訪問されたい方は事前にご連絡ください。興味ある方のお越しをお待ちしております。

● 9:00～17:00
☞ 土曜・日曜・中国の祝日を除く毎日

人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト

西安市蓮湖区労働南路296号民航大厦14F 日本側担当者:平野貴寛
TEL/FAX: +86-(0)29-88793312 中国側担当者:劉冬平
<http://www.jica.go.jp/project/china/004>



お断り

本誌は、プロジェクトの近況や情報を率直に読者に伝えることを目的としており、国際協力機構(JICA)の意見を代表するものではありません。

本誌「ひととキも」に関する皆さまのご意見、感想をお聞かせください。✉ toki.jica@hotmail.co.jp